Osaka University Knowledge Archive

Title	ドイツと日本のあいだで : 日常としての文化差
Author(s)	山口, 一郎
Citation	臨床哲学. 1999, 1, p. 108-116
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11075
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

臨床哲学シンポジウムの報告より
テーマ：「国際結婚」

ドイツと日本のあいだで
――日常としての文化差――

山口一郎

ご紹介にあずかりました山口です。今日は実はペーパーは用意していません。用意しないのはかえって難しいのですが、国際結婚について思いつくことをお話しするということでお引き受けしました。ただ、実は、国際結婚ということは僕にとって、僕と家内の話ということになります。僕と家内の話をおもてだってしろといわれても、本当のところ「いえ、できません」というのが一番はじめのお答えだったんですが、臨床哲学というシポジウムの主旨をお聞きして、お話しする気になりました。その主旨というのは、実際に現場に当たっている人たちが、病気を病んでいる人たちをその場でその人たちの手を取り足を取り、腰をかがめながら、いったいどうやって苦しみを癒せばいいのかと格闘している具体的な現場と人に即した哲学ということのようです。まさに同病相哀れむじゃないですけれども、国際結婚している人たち同士が集まって、酒を飲みながら、（普通酒が入らないとなかなかこういう話しになりません）おまえの奥さんどうなんだ、僕のところはこうだ、というような話になってくることも何回か経験はしました。それを酒を飲まずにしてみましょうということなんですが、実は、それでもそのような話の場でも話せないこともやはりあります。お酒がはいっても話せないということに関連して、ドイツの酔っ払いの話しをしておきますと、ドイツにはなかなか酔っぱらいがいません。日本で見ると懐かしい、飲んで回って終電になり、ベロベロになって、友達に命を預けますというか、見知らぬ隣の人の肩に頭をあずけながら終電に乗ってかえるというのは、ドイツにはほとんどありません。酔っぱらって酔っぱらっていっても話せないところで覚めているということなんでしょうか。ですから、そういうところは僕も話そうとは思いません。

お話しできるのは、先ほど同病相哀れむじゃないですけれども、日本同様、実に様々なカップルがいまして、いろいろな問題が持ち上がるんですが、衣食住という文化的な背景、その全体が違っているなかで、どうしたあんなことするんだろうという素朴な疑問を夫婦の間でお互いに持ち合う中で、悩みがたまって打ち明けるというようなことも幾度かありました。その一つのエピソードを皆さんにご紹介して、先ほどの「人格の核」

という問題に触れてみたいと思います。

先ほどのカルチャーショックという話しなんですけれど、カルチャーショックというのは、要するにショック、衝撃です。衝撃といっても色々あるんですが、今日、大阪について、阪大への行き方がわからないので道を聞いたんですけれども、新大阪駅の売店のおばさんが、「右へ行って、ドーンと行きなはれ」、「ドーンと行くともう地下鉄ですよ」と言うんですね。ああ、ドーンと行くんだなって思って、「よーいドーン」というのを思い出したりしておもしろいなと思いました。こういう驚きは、おもしろいなと思えるから救えますね。はは、まっすぐ行けばいいんだな、と分かりますから、ショックといっても、あ、おもしろいなという程度のショックです。こういうショックは、言語学者にしろ、社会学者にしろ、また哲学者にしろ、時々与えられると触発される興味深いショックです。色々な重要な考察のきっかけになったりするわけです。ただきっかけになるだけで、そのあとはそれを外から眺めて考察できる余裕のあるショックです。

ところが、人間関係上の誤解といった問題になりますと、自分が直接その中に巻き込まれていきますから、楽しめるような問題ではなくなるわけです。というのも外国生活で、100 ボルトが 220 ボルトになるとか、この機械を使うときはこうするといった技術的な問題はさほど問題ではありません。しばらくすればだいたい慣れます。いちばんはじめに大学にって驚いたのは便器の高さです。いってやろうと思ってもがんばらないとできない。自分は日本人なんだということを自覚させられるわけなんです。でもこういう技術的な問題はちょっと工夫すれば、解消できます。ところが人間関係の場合、そう簡単にいきません。例えば日本人はよくいろんな場合に笑顔を見せます。へらへらって笑うのには色々な意味があるわけですが、このへらへらっていう笑いが、日本人同士よく通じている笑いをドイツ人の前でやってしまったがために、大変な誤解を受けて、「おまえ、俺を嘲ってるな」というような持ってもいない悪意を読み取られてしまうような場合、これは大変です。人の相互の間の好意と悪意、この見えない強力な眼鏡、この眼鏡を通して生活するのが人の常ですから、実は、中性的な（ノイトラールな）インフォメーションなんてないといっていいでしょう。「８時に行きます」ってある人がある人にいいます。それを「８時にいくっていったな」、本当は７時５５分に来られるはずなのに８時に行くっていった、とか、本当は８時では早過ぎて、８時５分ぐらいに来てほしいのかもしれないと思ったり、８時に来るといってもそのインフォメーションというのは、どういう人がどういう具合にどんな時にどんな風にいっているかによって、とりわけ言っている人が自分に好意を持っているのか、悪意を持っているのかによって、全然違った解釈の仕方がされるわけです。

ですから人間関係における親しみとか疎遠さとかいった、基本的な人間関係の下地み

たいなところはすごく大事で、こういうところで誤解されてしまうと、それ以上の人間関係が成り立たなくなってしまうことがよくあります。自分の経験ですが、現象学の重要な会議が終わったあとで、ワインを飲んで、その人と親しく哲学の話題について議論していまして、どういうきっかけかわかりませんが、僕が微笑みながら、その人に「いや、こういうことなんじゃないですか」って言ったんです。そのとたん、相手の顔つきが急に険しくなって、激しく応答してきました。その応答に答えて、こちらの語気も強くなり、なんだか喧嘩の雰囲気になってきてしまって、いったいどうしたんだろうと困惑してしまいました。そのあと、その状況について考え、急に相手が血相を変えた瞬間の自分の発言について、発言の内容だけでなく、そのときの表情についても考えてみました。微笑にはいろいろな意味があり、討論上の対立が激しくなってくるとき、本能的に場を、雰囲気を和ませようとすると笑みが浮かぶという、そんな意味の自分の微笑みだったんだろうと思いました。ところがこの雰囲気を変えようとする本能的笑みがまったく逆に見られ、「蔑みの嘲笑」と受け取られてしまったのでしょう。そうでなければ、どんな激しい反論にも余裕を持って応答するその人の変化が理解できません。

しかし、当然ですが、僕自身、尊敬する相手を侮るなど、それこそ夢にも思ったことはないのですから、気づかずに生じていた自分自身の微笑を批判的に、距離を置いてみるという、生まれて初めての反省を強いられることになりました。いったい、自分は、雰囲気を和ませる微笑と、相手を嘲笑する笑いの区別ができていないのか。日本で討論の中でも色々な笑いがありますが、相手を嘲笑する笑いは大変まれです。一緒に笑うというのは、ほとんど討論を和ませて、先にすすめる潤滑油のような役割を果たしています。ですから、よく、討論の記録に、どこで誰が笑ったかという（笑い）がわざわざ記録されるわけで、これも日本ならではの現象でしょう。日本では当たり前の自分の笑いが、ドイツ人の相手にまったく逆にみられたとなると、一体自分は、この区別をどういままで学んできたのか、おまえは、挨拶の仕方、頭の下げ方、相手に対する表情をどう両親や兄弟、学校友達、周りの人々から学んできたのか、生まれて初めての問いに、すぐみつかるはずのない答えを真剣に求め始めます。真剣にならざるをえないのは当然でしょう。人は自分の表情をもたずにその社会に生きることはできませんから。

自分は、自分の笑いをどうやって学んできたのか？他の人々の表情をどう読み分け、応答する表情をどう身につけてきたのか？これらの問いを音を聞くことと比べてみましょう。日本人にとってはlとrの音が聞き分けられませんが、その音をヨーロッパの人はどうやって聞き分けてきたのでしょうか。言語学者のなかには色々な意見があって、１２歳までに区別された音を聞いていればちゃんと区別できて聞こえるはずだ、それ以後になってしまうと聞こえないといわれます。生物学的な音刺激の受容という問題とされる

わけです。ところが、身体の仕草の問題となりますと、聴覚だけ孤立させて観察できるわけではなく、触りながら見ながら、見ながら聞きながら、色々な感覚がいっしょになった経験が積み重なって、自己の身体性や他人の身体性が築かれてくる、そしてその築かれてくるときにそれぞれの文化差というものが、母と子、周りの人々と幼児の間で無意識的に伝達されているわけで、その大部分が無意識的に行われていて、それを反省の場に持ち出すというのは並大抵のことではありません。そもそも、反省の場に持ち出さねばならない必然性は、自分の笑いが誤解されたといった、いわば痛ましい経験を重ねなければ、生じてこないでしょう。ドイツ人の表情の猿真似をすれば、ドイツでの仮の自分の表情を獲得できるなどと思えるほど、人間関係は表面的なものではありません。自分の表情は自分の生きる生き方そのもの、自分の過去の歴史、習慣性、身体性そのものの表情なのです。

こうして、計らずしも、言葉の意味をこえた、表情の意味、身体性の意味の成り立ちを問わねばならない必然的な状況がカルチャーショックを経て生じてきます。この問いに対してどんな学問が対応できるでしょうか。ここで私が強調したいのは、フッサールの現象学、特に後期の発生的現象学の役割です。フッサールは、自然科学、精神科学の諸個別科学の成果を積極的に取り入れ、言語を通して反省にもたらされている諸々の意味の連関を問い進め、どのようにそれらの意味連関が私達に意識されるのか、そのされ方を意識の作用と意識の内容という相関関係として捉えようとしました。そしてそれだけでなく、その複数の相関関係がどのような成り立ちの歴史をもつのか、その発生をたどる方法をみいだしていきました。フッサールは『デカルト的省察』という本の中で、「わたしが、一瞥して事物を経験できるのは、本質発生による。･･･われわれは、幼児の時期に、一般に事物を見ることをまずもって習得せねばならなかった、･･･それらの把握作用は、中心的自我に対しては、あらかじめ形成されて与えられているものとして現われ、それらが実際にはたらくときには、中心的自我を触発し、はたらきへと動機づける。自我はいつも、そのような受動的綜合のおかげで、対象の環境をもつわけである。」（『世界の名著、ブレンターノ , フッサール』、263 頁以降を参照）と述べています。ここでいわれている「本質発生」とか「受動的綜合」について、これ以上ここで言及できませんが、フッサールはそのような知覚の意味の発生を現象学的に解明する方途を獲得し、発生的現象学の領域を開拓していて、特定の文化における身体性の意味の生成の解明に明確な指針を与えています。

さてここでもう一つ別のカルチャーショックのお話しをします。僕がミュンヘンで生活していたときですが、そのとき僕の友人で禅を広めようという人がいました。その人

が日本である宗派の禅を一生懸命やっていたとき、ドイツから禅を求める女性が彼のいたお寺にきて、その女性と日本で夫婦になり、その後ドイツに来てドイツ人に直接禅を教えていました。結婚をして２年ぐらいたっていたでしょうか、彼がいうには、「ちょっと驚いた、家内が、あなたは私に近づきすぎる、あなたは私の人格のなかに踏み込んで来すぎる、といった。これをどう理解すればいいのか分からない」というのです。もう一度いいますと「あなたは私に近寄りすぎる」というのです、でもどうして近寄りすぎていけないのでしょうか。普通日本ですと、夫婦一体感といいますし、一心同体ともいいます。また、お互いが空気みたいになるという言い方もしますが、これは、否定的な感じにも聞こえますが、空気がないと人間生きていけませんから、そういう意味も含めて空気になるのでしょう。
要するに日本では、夫婦間の一体感、身も心も一つなんだ、私とあなたは一つだという、理想、僕たちはまだそういうものをおそらく持っているのでしょう。この辺は個人個人ですから、簡単に規定できませんが、先ほどの吉沢さんの話でも、自分の内面をぴったり解ってもらえる、そういう欲望を若い人も持っているという話がありましたが、それは、ここでいう一体感という言葉で表現されているものと通じているといえるでしょう。このような一体感をいわば拒否されたわけです。

どうして拒否するのでしょう。一体だったらそれが理想じゃないでしょうか。一体という言葉ではありませんが、ドイツの対話哲学を代表するマルチン・ブーバーという哲学者は、「我－汝－関係」ということを主張します。「我－汝」というのは、まさに私とあなたが純粋な関係にはいる、つまり純粋な主観性の関係にはいること、比較したり、選択する余地は消えてしまうような関係にはいることを意味します。比較と選択は、「我－それ－関係」の「我と対象」の関係を意味します。ですから見合いするときに、この人の給料はこれこれで、どこの大学をでて、そしてどんな風というのは、みんな「それ」なわけですが、それでは人間というのは「それ」の集まりかというと、そうではなく、すべての人は、「我－汝」の関係にはいって、初めて本当の人間になるというのです。

では、そのような純粋な関係性にはいると、私とあなたのいうにいわれぬ、ある意味での本当の一体感が実現されるのではないかと思うのではないでしょうか。それこそ純粋に、キリスト教やユダヤの伝統にたつ、いわば人間と人間、自己と他者、人間と絶対者との間の本当の関係がわれわれの言う一体感に通ずるのではないのか、と問われることになります。そしてまさに、このような問いの次元で、そのドイツ人の女性は、「あなたは、私に近づきすぎる」というんです。どうして近づきすぎてはいけないのか。

ここから先は予測になります。先ほど自我の「殻」という話がでましたが、なぜ「殻」が意識されるかというと、殻から内部に入ってくることができなかったり、できたりす

るからでしょう。他の人は入って来られなくて、自分が自分と対面するなり、自分が神様と対面するといった場所なのでしょう。自分の思い、自分の意志、自分の何かといわれるもの、核とか中心というものがあって、この核の周りの殻みたいなものを通して入ってこられたとか、入ってきてないという感覚があるらしい。そうでなければ彼女は「私の中に近づくな」「私の中心に入ってきては困る」とはいえないはずです。

これは一体どういうことなのか。そのことを少しずつ考えたいわけですが、そのときに核と殻はどうやって作られるかというと、それは、言葉のやりとりを通して作られる、ごく単純なことなんですが、言葉のやりとりによって作られているのだと私は思います。「あなたこれ好きなの嫌いなの？」「いえ嫌いです、」「好きです」といったごく当たり前の言葉のやりとりです。「奥さん、日本に来てどんな感じですか」と色々家内が聞かれるわけですが、そうすると家内は「もう日本なんか嫌になっちゃう。満員電車で、家は狭いし、環境問題について意識はないし、･･･」と感じ、考えるままに率直に答えます。その率直さは、夫である僕には、ことのほかはっきりしていますから、僕は毎日毎日、彼女の不快感や理解できないことをまくし立てられるわけです。これについて十分彼女が納得できる説明するのがものすごい苦労で、いろいろ資料を集めて、日本だって公害問題を意識してないわけじゃないとか、ごみ焼却施設から放出されるダイオキシンの％を、ヨーロッパの水準とのけた違いの悪さにいらだちながら、だからこうなっているというその「だから」を説明しなければなりません。これは並大抵の話ではないのです。これに答えるためにはよっぽど日本の社会の全体に精通していなければ、そのような説明は無理です。僕は哲学をやっていて、いろいろな領域に興味があり、時間を見つけていろいろ調べることはできます。しかし、普通の会社づとめの人が、ドイツ人と結婚して日本の都会で生活しようとなったときには、とてもじゃないけど、そんな時間はなくて、「こうなんだから仕方ないだろう。黙って我慢しろ！」というくらいしかいえないでしょう。しかし、そこで「我慢しろよ、しばらくすれば慣れるんだから」という具合にほっておくわけにはいかないんです。そうすると結局、「あなたの核はどこにあるの？」ということになります。当然、僕は夫として、彼女の身の周りのこと、生活していく上で、少しでも大きな部屋に移るとか、日本語ができなければ僕がクッションになって、親との間に立って、それぞれいいたいこと自分を通して柔らかくいうとか、まさに様々に気を使っているわけです。しかし、黙って気を使っているのではだめなのです。「俺はこれこれのことをしたよ」「こういう背景があるんだから、こういうことをいったら、絶対気分を悪くする」とか。でもそうすると、「まともに言ってどうしていけないの？」という質問をされます。どうしていけないかという説明をしようとすると、それはもう並大抵ではありません。もう一昼夜考えても、「どうして」ということに対する答えがでてきませ

ん。先ほどのポルノの話がありましたが、「どうしてきちっとネクタイしめた人が、新幹線の中でポルノを見てるんですか、公の場での女性蔑視じゃないですか？」それを説明しなければいけないわけです。これは並大抵のことではありません。

「どうして、それでは、ドイツではそうしないのか。」「いったいどういうときに、そいつを見るのか。」そういった「どうして、どうして」ということを言葉にして、「こうなんだ、ここから先は分からないよ、ここからここまでは分かる」ということをはっきり言わなければだめなのです。そうやって初めて、こっちの言葉、相手の言葉、こっちの知識、向こうの知識、こっちの判断、向こうの判断、こっちの核作り、相手の核作りが始まっているわけです。そういう核作りという、人間の核というものを言葉のやりとりを通じてしょっちゅう作りつづけている、それがあたりまえの世界で彼女が育ってきています。小さいときから私という言葉を忘れずに、必ず「私が」という、Ichという言葉を使わずにドイツ語でいうことは不可能なんです。そして例えば“Ich　setze　mich.”といいます。机の上でも、どこでもいいのですが、「座る」というかわりに、「私は私を置く」といいます。これは再帰動詞といいますが、わざわざドイツ人が「私が私をおく」なんて思っているはずがないと思うかもしれません。しかし、こういう言葉の成り立ち、――そういう意味ではフランス語はもっとすごいらしいですが――表現の仕方が、ある意味での自分の客観視という訓練、こういう主体と客体の緊張関係、この緊張関係の中で生きることを言葉を通して訓練し続けているわけです。ずっとこういう表現様式の中に生きて、小学校から高校までずっとつながって、そして成人しているわけです。こうして、自分の意見を自分の意見として言うということ、そんなことは、当たり前以上に、当たり前なわけです。

日本だって個性を尊重してますといわれますが、だけどそれは言葉の上の話だけなんです。なぜかというと、一例ですが、たまたま飲み友達に聞いた話しです。そのドイツ人の奥さんが日本の学校とドイツの学校を比較して、日本の学校だと、女の子が髪の毛を染めてはいけないし、耳輪をしてもいけない。でもドイツの学校では、何を着てもいいし、赤茶にしても、黒毛にしても、おかまいなし、耳輪でも、鼻輪でもしたけりゃすればいい。ところが、日本の学校では、やれ、スカートの長さから、髪かたち、それこそ赤く染めようなら、目くじらたてるわけです。何秒か遅刻して、鉄の扉にはさまれて大怪我した生徒のこと皆さん覚えていらっしゃいますか。制服、ユニフォームといいます。ユニフォミズムでいいじゃないか、ということなのかもしれませんが、個性とかなんとかいいますが、個性というのは「自分の好み」なわけで、その自分の好み、自分にどう見えるかを表現して、それに対する他の人の反応を見ているわけです。そういう「表現－反応」という機会が全然与えられていなくて、それで自分の「個」なんてどこにど

うありうるのでしょうか。

もう時間が過ぎたので最後に一つだけ申し上げたいことがあります。それは、なぜ彼（禅をしていた日本の友達）が、奥さんの核の中に踏み込むことができたのかということです。彼は、ドイツで自分の気持ちを表現する十分な語学力を持ち合わせていません。そして、禅をやっている、何も考えないこと、言葉が沈黙の淵に沈んでいくことを真剣に、命をかけてやっているわけです。それで「無、無」とやっていて、いったい何になるのか。別に何もなりませんが、周りの世界が直接自分に映ってくる。ものすごく鮮明に、すごい鮮度を持って、びんびん響いてくるわけです。それは皆さん試しにやってみればいいと思います。三日でも五日でも。そして、そのあと、自然に触れたり人間に触れたりするとき、じかにすべてが映って来ちゃうんです。映って来ちゃうというのは、映そうとしているわけではもちろんありません。「能動ー受動」の話、「打つー打たれる」の話ではないんです。そうではなく、自分の意識というか、存在というか、それが純化されたようになったとき、自ずからすべてが映って来ちゃうものなんです。ですからドイツ人の奥さんが日頃やっている振る舞い、彼女が何をしたいのか、何を思っているのかということが、彼に自然に映ったんだと思います。だからそれに即応する反応を彼がした。女性にとって、それがあまりにも近いので、あまりにも自分の心にじかに反応してしまっているから、自分の核が消えちゃったような、それが嫌でたまらないというのだと思います。この嫌だという感覚はどこからどう来て、どう発展するものなのか、なかなか定かではありません。また、日本人の持っている自分を虚しくして、全く空にして、そして相手が自分に映ってきてしまう、移ってきてしまい、一体になる、この精神的な態度もそれとして、凄まじいものです。それは様々な芸道とか、剣道の時とか、仕事のときとか、世界に対する態度として日本に強く残っています。これは凄まじい、ある意味での他の人格の殻を破ってしまうような力です。しかしこういうあり方と、言葉を介して、核を作りながら何重に呼びかけるあり方と、表面的に見るとものすごく大きな差があるように見えます。だけども最終的に通じるというのが僕の持論です。

最終的にどう通底しているかということについては、今日はお話しできませんが、まずもって、違いということ強調しなければならない、相手との違いが解らなければ、相手の理解なんてありっこないと思います。違いに気づかないのは、自分で思いこめると信じているから、ショックを受けながら、そのショックに耐えることをしないで、理屈でそのショックを埋め合わせることができるはずだと思いこんでいるから、自分の生き方を投影して、投影したままで生きられると思うからです。その思いこみが崩れる機会というのは、少し外にでれば、外国に行って自分の身をさらせば、それまで生きてきた文化の過去であると同時に今生きている文化でもある自分の身体をそういう状況に置け

ば、いくらでもあなたを待ちうけているものです。

おわりに、今日お話しした内容に関わる書物として、フッサールの『デカルト的省察』、『受動的綜合の分析』、発生現象学について、新田義弘『現象学』、自分の本ですが、『他者経験の現象学』、他なるものとの経験の領域について、鷲田清一『分散する理性』をご紹介しておきたいと思います。御傾聴ありがとうございました。

（記録：紀平知樹）

第3回シンポジウム第一部（テーマ１「女性におけるセルフをめぐって」）にて発表していただいた北川東子さん（東京大学）と吉澤夏子さん（日本女子大学）の講演記録は、紙面の都合により、次号に掲載いたします。（編集者記）